

大浦、鹿崎、内外ノ浦から呼崎口の旧道の怪～酒井明 説話集 15※～

今でこそ立派な道路で、少々しけても波をかぶる心配もなくなったが、下り松から大浦、鹿崎、内外ノ浦から呼崎口の旧道は、大じけの日は油断のできない所があった。

それでも湾内を見渡す景色は、故里の海なる故ではないが天下一品。うたせの白帆、落日の輝き、月の光を反射して、打寄せくだけの波が潮の香を漂わす。海鳥の乱舞に目をうばわれた人もあるだろう。

そんな道も浜が埋められ、よせの茂みもなくなって、風情の程は少なくなった。

ある晩のこと、この道を自転車で、姫野井から宿毛へ帰る男があった。

昼もめったに、夜ともなればもちろんのこと、車といったものはただの一台も通ることのない時代である。

もうしばらくで宿毛だぞ。大島、片島の灯も見える。そう思いながらペダルを踏むその耳に、浜辺のよせの間からチリンチリンと鈴の音が響く。

この真夜中にと立ち止まる。空耳だったかと動き始める。どうしたことかまた聞こえる。よせの茂みに入ってみて、声をかけても返事はない。

静かな波音の間に、はっきりと聞こえる鈴の音。何だと思いながら浜辺に出て、波打ち際をたどってみる。それらしいものを見つけることは到底できない。不思議なこともあるものよ、と道路に出る。

自転車のベルはガタガタ道でも勝手に鳴るような代物ではない。鳴ったにしても1、2度チンチンくらいなことだろう。伸びやかな丸い音、チリンチリンしばらく間をとり、チリンチリン。

どうしたことぞと訝りながら、正体不明のままペダルをふみ始めた。思わぬ時間をとったものだ。帰宅したのは深夜の2時頃になっていた。

当時の夏の夜は、そんな話題でにぎわったものだった。



※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時)長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。